

芥川龍之介文学の揺籃^{ゆりかご}としての両国 —芥川の怪奇文学—

行 吉 正 一*

目 次
はじめに
1. 関東大震災後の芥川龍之介の「両国もの」
(1) 「少年」
(2) 「大導寺信輔の半生 —或精神的風景 画—」
(3) 「追憶」
(4) 「本所両国」
2. 新宿移転後の芥川龍之介の両国作品
(1) 「大川の水」
(2) 「 ^{しょうず} ^{しい} 椒図志異」
3. 芥川龍之介の怪奇趣味を現わした作品
(1) 王朝物
(2) 童話
(3) キリスト教物
おわりに

キーワード 芥川龍之介 本所両国 怪奇 関東大震災

はじめに

芥川龍之介は、1892年（明治25）3月1日に、東京市京橋区入船町8丁目1番地の築地居留地（現、東京都中央区明石町10-11）の一角に生まれた。父親は、^{にいばらとしぞう}新原敏三、母親は新原フクである。

父親の敏三は、芥川龍之介の生まれた頃には、京橋区入船町に本店を置く、牛乳販売店耕牧舎の支配人で、各地に支店も置くようになっていた。耕牧舎は実業家の渋沢栄一が経営していた牧場である。牛乳販売業は、当時としては斬新で、また、築地居留地は、外国人の居住地で、公使館や教会や学校もつくられ、時代の先端をゆく環境の中で芥川龍之介は誕生したことになる。

ところが、芥川龍之介が誕生して約8ヶ月後、母親フクが突然発狂する。長女ハツ（芥川龍之介の姉）の病死、フクの兄芥川道德の死、夫敏三の放蕩などが、産後の肥立ちの悪さと相まって発狂したものと

*東京都江戸東京博物館学芸員

思われる。

そこで、龍之介は、母親フクの実家、東京市本所区小泉町15番地（現、東京都墨田区横綱3丁目22番11号）の芥川道章^{あくたがわどうしょう}（1849-1928）宅に引き取られる。道章は、龍之介の母フクの11歳年上の実兄である。芥川家は、江戸幕府の御用部屋坊主をつとめた旧家であり、龍之介を迎えた当時、道章は、東京府の土木課に勤務していた。また、道章の妻、儔^{とも}は、幕末維新期の江戸の通人、細木香以^{さいきこうい}の姪に当たる。龍之介が預けられた芥川家は、江戸の文人趣味の伝統が多分に残っていた家であったのである。

龍之介は、生後8ヶ月から両国の芥川家で育ち、養父母や伯母たちに愛情を持って育てられ、1904年（明治37）、12歳の時に、正式に芥川家と養子縁組を結び、芥川龍之介となる。

芥川龍之介の生まれたのは、築地居留地という西欧文明がそのまま移植されたような場所であり、また、家も、時代の先端を行く牛乳の販売店であった。ところが、母親の病気により、養子となったのは江戸時代を色濃く残した両国という場所であり、芥川家も江戸時代から続く旧家であった。明治時代という激動期にあたり、芥川龍之介は、図らずも、時代の流れとは全く逆に、時代の最先端から前の時代へと投げ込まれた形となる。このことは、芥川龍之介の文学を読む上で大きな意味のあることであると思われる。むろん、芥川龍之介が両国で育ったのは18歳までで、それは作家となる以前であるが、人間形成において最も大切な青年期までを育った両国は、芥川龍之介文学に強い影響を与えたはずである。芥川龍之介文学にとって、両国という場所は、どのような意味のある場所なのか、ここでは芥川龍之介の怪奇小説という観点から考えてみる。

1. 関東大震災後の芥川龍之介の「両国もの」

関東大震災は、1923年（大正12）9月1日、神奈川県相模湾を震源として発生したマグニチュード7.9の地震災害である。この大地震により東京を含む関東地方は甚大な被害を被った。芥川龍之介は、このとき31歳で、田端の自宅で罹災している。しかし、幸いなことに、田端が地盤の固い台地の上にあり、自宅も新築後10年もたたないという条件も幸いし、芥川家はさしたる被害は受けなかった。

この時、芥川龍之介は、すでに作家として活動しており、妻子もあった。震災直後、芥川龍之介は、「中央公論」、「改造」などの雑誌に、関東大震災に関する記事を書いている。震災直後、各雑誌は、震災特集号を数多く出しており、それらの要望に応じて書いたものである。

そして、芥川龍之介は、震災後、それらとは別に、両国を舞台とした小説や随筆を書いた。関東大震災は、東京に大きな被害を及ぼしたが、中でも、地盤の弱く、また、木造家屋の密集した本所、深川などの下町地域での被害は甚大であった。ことに、芥川龍之介が18歳までを育った場所のすぐ近くある本所被服廠跡地では、多数の人々が焼死し、このことは、芥川龍之介に大きな衝撃を与えた。この衝撃により、芥川龍之介は、あらためて自分の育った場所、両国を小説や随筆に書いたと考えられる。それらの作品には、「少年」、「大導師信輔の半生 一或精神的風景画一」、「追憶」、「本所両国」があるが、発表された年をみると、芥川龍之介は、これらの作品を、震災の翌年から死の年まで、毎年書いていることになる。関東大震災をきっかけとなって書かれたこれらの作品を読むと、芥川龍之介にとって、両国

という場所が、いかに大切な場所であったかが分かる。

これらの作品については、拙稿「芥川龍之介の両国」(『東京都江戸東京博物館調査報告書第24集 両国地域の歴史と文化』(2011))で、概要を述べたので繰り返さないが、ここでは次のような点を指摘しておく。

(1) 「少年」

「中央公論」(第39年第4号・5号 1924年(大正13)4月1日・5月1日)に掲載された小説。関東大震災後、堀川保吉が、自分の育った大川端での少年時代を5つの話を通して回想したもの。

この作品は、関東大震災後、最初に書かれた、両国を舞台とする小説である。主人公の堀川保吉は、関東大震災の起こった年の12月25日、乗合自働車の中で「娑婆苦を知らぬ少女」と出会い、それをきっかけに「大川の向うに人となった二十年前の幸福」を回想する。「大川の向う」つまり、堀川保吉が育った両国を思い出すきっかけは、少女と出会ったからではあるが、ただ、少女と出会ったからばかりではない。堀川保吉が、自分の少年時代を思い出すのは、何より、その両国が、関東大震災によって甚大な被害を受けたからである。最初の章の「クリスマス」には、次のように記されている。

保吉もまた二十年前には娑婆苦を知らぬ少女のように、あるいは罪のない問答の前に娑婆苦を忘却した宣教師のように小さい幸福を所有していた。大徳院の縁日の葡萄餅を買ったのもその頃である。二州楼の大広間に活動写真を見たのもその頃である。

「本所深川はまだ灰の山ですな。」

「へええ、そうですかねえ。時に吉原はどうしたんでしょう？」

「吉原はどうしましたか、一浅草にはこの頃お姫様の淫売が出ると云うことですな。」

隣のテエブルには商人が二人、こう云う会話をつづけている。

銀座のカフェでの商人たちの会話を保吉が聞いている場面であるが、当時ならどこでも交わされていたような、この会話の中に「本所深川はまだ灰の中ですな。」という言葉がある。この言葉こそ、堀川保吉が、両国で育った少年時代を思い出すきっかけとなった言葉である。この章以降、堀川保吉は、次々と両親に愛され育った両国での幸福な少年時代を思い出すのであるが、その両国が、関東大震災により大きな被害を受け、「灰の山」となり失われてしまった。関東大震災が、自分の少年時代を思い出すきっかけになったのである。

そして、この「少年」以降、芥川龍之介は、毎年、自分の両国時代を様々な形の作品にしてゆく。

(2) 「大導寺信輔の半生 —或精神的風景画—」

「中央公論」(第40年第1号 1925年(大正14)1月1日)に発表された小説。作者と同じ、三十代半ばの大導寺信輔の半生を、六つの挿話によって語ったもの。自伝の体裁をとっているが、かなりの虚構化がなされている。

前作「少年」は、「二十年前の幸福」を回想するものではあるが、当時の文壇の反応の中には、観念的、知的操作を加えすぎという評価もあり、総じて批判的であった。幸福な少年時代といいながらも、技巧的な操作が入り、少年らしさが出ていないという批評である。しかし、この「大導師信輔の半生 一或精神的風景画一」になると、その傾向がさらに強調されてゆく。この作品の主眼は、幸福な少年時代、青年時代を回想するというものではなく、自意識の強く発達した青年を描くことにある。その中で、ややもすると両国という場所が、否定的に描かれている印象を受けるが、この作品を丹念に読むと、決して両国という場所が否定的に描かれているわけではないことがわかる。「本所」という最初の章は、「大導師信輔の生まれたのは本所の回向院の近所だった。彼の記憶に残っているものに美しいが町は一つもなかった。」という書き出しであるが、「信輔はもの心を覚えてから、絶えず本所の町々を愛した。並み木もない本所の町々はいつも砂埃りにまみれていた。が、絶えず本所の町々を愛した。」と記される。このような、微妙な両国への思いは、次のように説明される。

実際彼の自然を見る目に最も影響を与えたのは見すほらしい本所の町々だった。彼は後年本州の国々へ時々短い旅行をした。が、荒あらしい木曾の自然は常に彼を不安にした。又優しい瀬戸内の自然も常に彼を退屈にした。彼はそれ等の自然よりも遥かに見すほらしい自然を愛した。殊に人工の文明の中にかすかに息づいている自然を愛した。三十年前の本所は割り下水の柳を、回向院の広場を、お竹倉の雑木林を、——こう言う自然の美しさをまだ至る所に残していた。彼は彼の友だちのように日光や鎌倉へ行かれなかった。けれども毎朝父と一しょに彼の家の近所へ散歩に行った。それは当時の信輔には確かに大きい幸福だった。しかし又彼の友だちの前に得々と話して聞かせるには何か気のひける幸福だった。

ここには、自分の育った両国への深い愛着が記されている。また、激しく近代化する時代の中であって、近世の面影を残す「割り下水」、「回向院」、「お竹倉」をあげているということは、注目すべきである。震災後、芥川龍之介が書いた「両国もの」には、近代化する東京から近世の江戸への逃避とでもいったものが存在するようにも思えるからである。

(3) 「追憶」

「文藝春秋」(第4年第4号～第5年第2号 1926年(大正15)4月～1927年(昭2)2月)に掲載された随筆。「僕」の幼年時代から、幼稚園、小学校、中学校の時期までを回想した随筆で、短い断編(200字～600字程度)の44章からなる。明治時代の両国がよく描かれている作品で、中流階級の生活、江戸時代の習慣を強く残している人々の様子、様々な娯楽、小中学校での様子などが印象的に描かれている。前の2つの創作作品とは異なり、過去を率直に回想している作品と読める。むろん、随筆といえども、あくまで文学作品であり、事実の忠実な記録ではないが、「追憶」は、明治時代の両国の様子をうかがうことができるという意味でも貴重な文章であろう。

「追憶」の中で注目すべきは、「僕」が、幼年時代から、幽霊の話や怪談を多く聞いていたということ

である。たとえば、「幽霊」という章では、「僕」が、女中のおてつさんというお婆さんから、いろいろな怪談を聞かされたことが述べられる。「僕」は、そのためか、夢とも現ともつかぬ境にいろいろの幽霊に襲われがちで、しかもそれらの幽霊は大抵は、おてつさんの顔をしていたというのである。

また、「七不思議」は次のような断章である。

そのころはどの家もランプだった。したがってどの町も薄暗かった。こういう町は明治とは言う条、まだ「本所の七不思議」とは全然縁のないわけではなかった。現に僕は夜学の帰りに元町通りを歩きながら、お竹倉の藪やぶの向こうの莫迦囃を聞いたのを覚えている。それは石原か横網かにお祭りのあった囃しだったかもしれない。しかし僕は二百年來の狸の莫迦囃しではないかと思ひ、一刻も早く家へ帰るようにせさせと足を早めたものだった。

両国には、芥川龍之介が生活していた明治時代中期から後期にかけても、江戸時代から伝わる「本所七不思議」という怪談の雰囲気、残っていたことがわかる。このような、幽霊や怪談に関する断章が、「追憶」には多く記されており、芥川龍之介は、このような話に強い関心があったことがわかる。

(4) 「本所両国」

「東京日日新聞(夕刊)」に、1927年(昭和2)5月6日から5月22日まで掲載された随筆。本所両国あたりを新聞社のO君とめぐり、幼年、小中学校時代、震災時などの思い出を懐旧の念とともに全15章によって描く。東京日日新聞は、「大東京繁昌記」という題名のもとに、作家たちによる東京のルポルタージュを夕刊に連載した。関東大震災から4年がたち、東京は、「大東京」となり「繁昌」を始めた時期にあたっての企画であり、その一つが、芥川龍之介の「本所両国」である。

この作品で最も印象に残るのは、関東大震災についての言及である。まずは、復興する両国界隈の様子に驚く。鉄筋コンクリートに建て替えられた母校の第三中学校や新しく架かっている橋などである。また、一方では、関東大震災前と変わらないものを見出し、それをいとおしむ。両国駅の引き込み線の草土手や、焼け残った樹木などささいな物を愛情をもって記す。また、焼け残った樹木の傍らでお婆さんと少女が、いなり寿司を食べている様子や、一銭蒸気に乗っている人々の以前と変わらぬ様子にも目をとめている。また、維新前、父親が、若侍に化けた狐に出会ったことなど、両国界隈の不思議な話も紹介される。

このように、「大東京繁昌記」といいながら、新しく変わっていく東京への讃歌というより、関東大震災前の東京を愛着を持って懐古するという性質の文章が、「本所両国」である。

さらに、その懐古的な態度には、新しい時代への不安や不信、そして、批判のようなものが含まれていることも見逃せない。第7章の「乗り継ぎ「一銭蒸気」」では、かつては京橋にも河童が出たという話を紹介し、昔の隅田川には、河童は決して少なくなかったであろうという。また、父親の友人が、甲羅だけでもたらいほどもあるすっぽんを隅田川で見たという話も紹介し、「明治時代—或は明治時代以前の人々はこれ等の怪物を目撃する程この町中を流れる川に詩的恐怖を持っていたのであろう。」とい

う感想を述べる。ここには、河童のような空想上の動物を否定するのではなく、それが、「詩的恐怖」心の現れであり、それは、人間の余裕や豊かさに通じる心情であることが示される。そして、そのような時代が、関東大震災とそれに続く復興によって確実に終わったことを芥川龍之介はこのルポルタージュの中で確認する。

この文章が発表された2ヶ月後、芥川龍之介は自死するのであるが、それは、執筆活動からくる疲労の重なり、体調の不良などが原因ではあるが、「本所両国」に書かれている内容から考えると、自分の依ってきた基盤の崩壊、そして、新しい時代への強い違和感などが、芥川龍之介を自死に追い込んだのでないかと考えられるのである。

芥川龍之介は、関東大震災をきっかけに、自分の育った両国についての作品を書き始めるが、それらの中では、少年時代の幸福や、怪談などが人々の生活の中に残っていた両国という地域が、愛着をもって懐古される。そして、関東大震災によって、その両国が、また、両国によって象徴される近世的な社会や価値観が、壊されたことへの不安感、不快感が記される。昭和という時代に入るとすぐに、芥川龍之介は自死するのであるが、それは、自分の育った両国的なものが失われたしまったことへの絶望が大きな原因であるとも考えられる。関東大震災をきっかけによって書かれた作品によって、両国が、芥川龍之介にとって、いかに大切な場所であったかが分かるのである。

なお、芥川龍之介と関東大震災とのかかわりについては、五島慶一氏の報告を、また、「両国もの」については、安藤公美氏の報告を参照していただきたい。

2. 新宿移転後の芥川龍之介の両国作品

芥川龍之介が、自分の育った両国を作品にするのは、むろん、関東大震災後だけではない。それ以前にも、両国界隈や隅田川が舞台になっている作品がある。それらの作品では、芥川龍之介が土地感をもっている両国が、作品の舞台として描かれており、芥川龍之介と両国の関係について考察するには、興味深い作品である。

「開化の良人」(「中外」1919年(大正8))については、神田由美子氏の報告を、また、「妖婆」(「中央公論」1919年(大正8))と「奇怪な再会」(「大阪毎日新聞」1921年(大正10))については、畠田明子氏の報告を参照していただきたい。

さて、ここでは、芥川龍之介が、両国を離れ、新宿に移転した後に書かれた、両国に関する作品をとりあげたい。芥川家は、1911年(明治44)、芥川龍之介が18歳の時、東京府下豊多摩郡内藤新宿2丁目72番地の耕牧舎牧場の、龍之介の実父の持ち家に転居する。転居の理由は、養父、道章が、水害地である両国からの転居を考えたからといわれている。隅田川河畔の両国は、しばしば隅田川の洪水の被害にあっており、特に1910年(明治43)の洪水は、両国に甚大な被害を及ぼしたのである。

芥川龍之介が、新宿移転後書いた作品は、「大川の水」という随筆と「椒図志異」という怪奇譚を集めたノートである。それらは、18歳までを育った故郷、両国を初めて離れ、改めて両国という場所につ

いて思い、その思いを文章にしたもので、若い時代の芥川龍之介の両国への思いが記されているものである。

(1) 「大川の水」

「大川の水」は、歌人の佐々木信綱が主催する短歌雑誌「心の花」第18巻第4号（1914年（大正3）4月1日）に発表された随筆である。本文末に、「一九一二、一」と記されていることから、執筆されたのは、芥川龍之介一家が、両国から新宿に転居して一年あまりの後、19歳の時であることがわかる。

「大川の水」は、自分が生まれ育った大川（隅田川）に対する愛着を、山の手の郊外に移ってからも強く感じるという内容の随筆である。「大川の水」が、永井荷風の紀行文「海洋の旅」（「三田文学」第2巻第10号（1911年10月1日））と、北原白秋の詩集『思ひ出』（1911年6月）の序文「わが生ひたち」の影響を強く受けていることは、様々な指摘がある通りである。作品としては、まだ、芥川龍之介の個性が十分には発揮されておらず、習作の域を出ていないといっている。文学史的に見ると、永井荷風や北原白秋など自然主義文学に対抗する耽美的な傾向を持つ作家の感性に影響を受け、また、ダンヌンツィオ（Gabriele D'Annunzio, 1863-1938）、ホフマンスタール（Hugo von Hofmannsthal, 1874-1929）、メレシコフスキー（Dmitriy Sergeevich Merezhkovskiy, 1866-1941）など西欧の19世紀末の作家についても言及していることから、耽美主義的、芸術主義的な傾向を持つ作品とすることができる。

此三年間、自分は、山の手の郊外に、雑木林のかげになっている書齋で、静平な読書三昧に耽っていたが、それでも猶、月に二三度は、あの大川の水を眺めにゆくことを忘れなかった。動くともなく動き、流るともなく流れる大川の水の色は、静寂な書齋の空気が休みなく与える刺激と緊張とに、切ない程あわただしく、動いている自分の心をも、丁度、旅に出た巡礼が、漸く又故郷の土を踏んだ時のような、さびしい、自由な、なつかしさとにかくしてくれる。大川の水があって、初めて自分は再、純なる本来の感情に生きることが出来るのである。

大川への愛着が、手放して表現されているが、それが「大川の水」の特徴である。青年期までを育った両国を離れ、新しい場所、新宿に移り、また、学校も、第一高等学校に進学し、生活の環境が大きく変わったことで、かつて住んでいた両国を流れる大川を思い起こし、寂しさや懐かしさを感じる様子が直接的に表現されている。さらに、18歳までを育った場所を離れ、いよいよ大人になってゆく不安も感じられる。「大川の水」は、両国を離れてあらためて感じる大川への愛着を記した作品といえる。

(2) 「^{しょうずしい}椒図志異」

「^{しょうずしい}椒図志異」は、芥川龍之介が、第一高等学校時代から東京帝国大学時代にかけて、家族、知人などから聞いたり、また、読書などによって知った、妖怪、天狗、河童、幽霊などの怪奇譚78編を大学ノートに清書したものである。これは、1955年（昭和30）、葛巻義敏編で、ひまわり社から写真復刻版で初

めて公にされ、同年の『芥川龍之介全集』第19巻（岩波書店）に収められた。

「椒図」という言葉についてであるが、芥川龍之介は、「白獸」という書きほごし原稿に、「嘗、椒図と云う号を付けた事がある。椒図とは、八犬伝によると「黙するを好む」龍だと云う。そこで、この号を得意になって、椒図居士とか何とかつけた。」と書いており、「椒図」が、芥川龍之介の好む言葉であったことがわかる。また、「志異」とは、怪奇譚のことである。

「椒図志異」は、短い怪奇譚78話から構成されており、「怪例及妖異」（17話）、「魔魅及天狗」（26話）、「狐狸妖」（7話）、「河童及河伯」（5話）、「幽霊及怨念」（20話）、「呪詛及奇病」（3話）という章に分かれている。話の最後に出典が記されているものがあり、母親から聞いたもの9話、父親から聞いたもの3話、知人などから聞いたもの9話、そして、本によって知ったもの16話となっている。出典のないものは、読書などから知り得たものであろう。

芥川龍之介は、1912年（大正1）8月2日付けの、一高時代の親友、藤岡蔵六宛ての手紙で次のように書いている。「Mysteriousな話しを何でもいゝから書いてくれ給へ、文に短きなんて謙遜するのはよし給へ 如例静平な生活をしてゐる時に図書館へ行って怪異と云ふ標題の目録をさがしてくる此間稲生物怪録をよんだら一寸面白かつた其外比叡山天狗の沙汰だの本朝妖魅考だの甚現代に縁の遠いものをよんでゐる。」当時の芥川龍之介が、怪奇譚に強い興味を持っていたことがわかる。

「椒図志異」の話の中には、芥川龍之介の後の作品に使われた話もある。たとえば、「狐狸妖」の「1」の話は、芥川龍之介の父親が、正月の年始の帰りに若侍に化けた狐に出会った話であるが、これは、『本所両国』の「緑町、亀沢町」に使われている。また、「河童及河伯」の「1」は、京橋の植木屋が、河童に出会った話であるが、これも、『本所両国』の「乗り継ぎ「一銭蒸気」」に出てくる。

しかし、「椒図志異」は、書かれたのが、まだ、若い時期であったことから、自分の小説のための素材ノートではなく、純粹に自分の興味をひく怪奇譚を集めたノートと考えられる。新宿に移り、改めて怪談などが日常生活の中にあつた両国時代を思い起し、それらの怪談奇談を残しておこうとしたものと考えられる。

「椒図志異」では、出典が記されているもののうち、父母から聞いた話が多くを占める。「追憶」にも書かれていたが、芥川龍之介は、父母、女中から、数多くの怪奇譚、幽霊譚を聞いていた。芥川龍之介が育つた明治時代の両国は、まだまだ、江戸時代の風土を強く持っていた場所だったのである。あるいは、それは、両国という地域だけの特徴ではなく、時代的にも、明治時代までの人々には妖怪譚が身近にあり、多くの人々が、それらを好んだとすることができるかもしれない。

両国という地域性、さらに、明治時代という時代性を反映した妖怪譚を、芥川龍之介は、好み、それらを収集しノートにしたものが、「椒図志異」ということができる。

長年住んでいた場所を離れ、あらためて、その場所への愛着を感じるということは通常あることであるが、芥川龍之介にとっても、両国を離れ、両国への愛着を新たにし、その思いを「大川の水」や「椒図志異」に書き留めたと考えることは無理なことではない。それが、作家になる以前のことであれば、なおさら、それらの文章は、芥川龍之介の個人的な心情が直接に現わしていると言っていいであろう。芥川龍之介は、青年時代までを育つた両国を離れた直後から両国への愛着を強く感じ、両国という場所

の特徴を改めて意識したのである。それは、大川（隅田川）に残る、江戸時代以来の生活や美意識であり、合理的な理性では分かりきらない怪異な話の多く残る両国の暮らしであった。「大川の水」と「椒図志異」は、芥川龍之介が、最初に書いた両国論であり、この両国への好意は、芥川龍之介の作品に意外に大きな方向性を与えているのではないかと考えられる。次章においては、両国が、芥川龍之介の作品に与えた影響について述べる。

3. 芥川龍之介の怪奇趣味を現わした作品

芥川龍之介が、自分の育った両国時代を回想した「追憶」や「本所両国」などにより、両国という場所が、本所七不思議という怪奇譚を生み出す地域であり、そこに生活していた人々の日常に怪奇な話が息づいていたことがわかる。また、芥川龍之介自身、そのような話に興味を持ち、両国を離れた直後、両国で聞いた話や、書物で集めた話を、「椒図志異」というノートにまとめていた。このように、芥川龍之介には、怪奇趣味が強かったわけであるが、両国で培われたともいえる怪奇趣味が、芥川龍之介の文学作品にはどのように現れているのであろうか。芥川龍之介の作品は、いくつかのタイプに分けることができるが、その中でも、「王朝物」、「童話」、「キリスト教物」は、写実的ではなく、超自然的な設定がなされていることに気づく。それは、芥川龍之介が、両国時代に影響を受けた怪奇趣味が大きく働いていたからではないだろうか。

(1) 王朝物

芥川龍之介は、作家生活の前半期に、「今昔物語集」や「宇治拾遺物語」などの王朝時代の説話集を題材とした作品を数多く書いたが、それらを「王朝物」という。その「王朝物」の多くは、超自然的な物語であり、芥川龍之介の怪奇趣味が直接に現れているものと言うことができる。しかも、「王朝物」が書かれたのが、芥川龍之介文学の初期であるとうことは、両国で培われた怪奇趣味が直接に影響しているということもできるのではないだろうか。

たとえば「鼻」（「新思潮」創刊号（1916年（大正5）2月15日））は、高僧である禅智内供が、自分の長い鼻を異常に気にするという話で、人間の自意識というものを滑稽に描いたものである。夏目漱石にも絶賛された「鼻」は、『今昔物語集』の「池尾禅珍内供鼻語第二十」に依ったと考えられる。物語中、内供が、自分の鼻を小さくする方法が描かれるが、それが、鼻をゆで、人に踏ませるという荒唐無稽で、非現実的なものである。

また、「龍」（「中央公論」第34巻第5号（1919年（大正8）5月1日））は、奈良の、蔵人得業恵印という法師のついた嘘が本当になるという話である。恵印は、奈良の猿沢の池から龍が昇ると立札を建てて、それが、大きな騒ぎを引き起こし、なんと実際に龍が現れる。嘘をついたことについての恵印の微妙な心理の揺れを見事に描いている作品である。この物語の典拠は、『宇治拾遺物語』の「卷第十一 六 蔵人得業猿沢の池の龍の事」であるが、この原話では、龍の昇天は見られない。芥川龍之介が、龍が昇天するという超現実的な話に変えたのである。ここには、やはり、奇談怪談への趣味が強く

表れているということができる。

このほか、死を象徴する男が現れる「青年と死と」(1914年(大正3)9月)、道祖神が現れる「道祖問答」(1917年(大正6)1月)、絵仏師の良秀が、実の娘が焼け死ぬのを見ながら屏風の傑作を仕上げる「地獄変」(1918年(大正7)5月)、怪しげな力を持つ沙門が登場する「邪宗門」(1918年(大正7)10~12月)、真っ白な蓮華の花を口から咲かして、松の枯木の梢で死ぬ法師を描いた「往生絵巻」(1921年(大正10)4月)、黄泉の使が小野小町のところに現れる「二人小町」(1923年(大正12)3月)など、「王朝物」と呼ばれる作品の中には、非現実的な物語が数多くあり、芥川龍之介の怪奇趣味を強く示している。これら怪奇趣味を示す「王朝物」の数の多さは、両国で培われた怪奇趣味を現わしているといえよう。

(2) 童話

芥川龍之介の作品の中には、童話も含まれる。知性的で懐疑的な芥川龍之介が、純真な子供の読み物、童話を書いたというのは、少々違和感があるかもしれないが、1918年(大正7)から1923年(大正12)までの作家活動の中期に童話を書いている。きっかけは、漱石門下で、芥川龍之介には先輩に当たる鈴木三重吉が、自分が創刊した児童雑誌「赤い鳥」に作品を請うたからである。「赤い鳥」のほかにも、芥川龍之介は、「サンデー毎日」などに8編の童話を発表している。

それらの作品は、どれも、暖かな人間性、誠実な人間性への信頼が基調となっているが、いずれも、超現実の世界が展開されており、空想的幻想的な世界が描かれている。

たとえば、「蜘蛛の糸」(「赤い鳥」創刊号(1918年(大正7)7月1日))では、地獄に落ちた^{かんだた}韃陀多という大泥棒を、お釈迦様が、蜘蛛の糸を地獄に垂らして救おうとするが、自分だけが助かろうとした韃陀多は、結局、また地獄に落ちてしまうという話。この話も、地獄や極楽が物語の舞台と設定された超自然的な物語である。

また、「杜子春」(「赤い鳥」第5巻第1号(1920年(大正9)7月1日))では、唐の時代の杜子春という青年が、仙人になろうとして、様々な修行をするが、地獄に落ちた両親の苦しむ姿を見て「お母さん」と叫んでしまう。声を出さないという修行をしていたのであるが、母親のことを叫んでしまうことによって、人間らしさの大切さを知らされる。この話は、「杜子春伝」(唐の時代の伝奇集『続玄怪録』収録)を翻案したもので、仙術の世界が展開される中で暖かな人間性への信頼が描かれている。

このほか、山の神から特殊な力を持つ犬をもらい、お姫様を救いだす「犬と笛」(1919年(大正8)1月)、インドの若い魔術師が出てくる「魔術」(1920年(大正9)1月)、占い師の老婆やインドの神アグニが出てくる「アグニの神」(1921年(大正10)1~2月)、だまされて二十年ただ働きをさせられた男が、仙人になるという「仙人」(1922年(大正11)4月)、魔法の長靴、マントル、剣が出てくる「三つの宝」(1922年(大正11)2月)、白い犬が、仲良しの黒い犬を見殺しにし、全身が黒く変わってしまう「白」(1923年(大正12)8月)、魔法の指輪の話「三つの指輪」(未完)(1923年(大正12)ころ)があり、いずれも、怪奇的世界の中で、物語が展開されている。

芥川龍之介が書いた童話が、いずれも、超現実的な舞台設定を持っているのは、やはり、両国時代に

培われた怪奇趣味がその源となっているのではなかろうか。

(3) キリスト教物

芥川龍之介の小説には、「キリシタン物」と呼ばれている作品群がある。ただ、「キリシタン」というと、キリスト教が日本に伝来してから禁教時代を経て、明治初年に解禁になるまでの、キリスト教と日本との特殊な関係下のキリスト教(徒)を指し、キリスト教に強い関心を持ち続けた芥川龍之介は、確かに「キリシタン」をテーマに「キリシタン物」を多く書いたのだが、それ以外にも、キリスト教に関する作品(「きりしとほろ上人伝」や「西方の人」など)も書いているので、ここでは、それらも含めて「キリスト教物」ということにする。

自死の床に聖書が置かれていた芥川龍之介が、キリスト教にいかに関わったかは、実は難しい問題であり、作品を書く上において、知的、審美的、技巧的の面からキリスト教に関わったであろうし、また、実人生上の、倫理的、宗教的の面からの関わりもあろう。しかし、ここでは、芥川龍之介の怪奇趣味という観点から、「キリスト教物」を見てみたい。そうすると、「キリスト教物」の作品の舞台設定が、超自然的であり、そこには、「王朝物」や「童話」と同様に、芥川龍之介の怪奇趣味が強く現れていることがわかる。

たとえば、「煙草と悪魔」(「新思潮」第1年第9号(1916年(大正5)11月1日))は、フランシス・ザヴィエルについて日本にやってきた悪魔と、切支丹に帰依した日本人商人が賭けをする話である。悪魔は、賭に負けるが、ただ、その結果、人を誘惑する煙草が日本に広まることになり、誘惑という悪を広めた点では、悪魔は賭に勝ったのかもしれないという。この作品には、日本には、キリスト教社会でのようには、善と悪が存在しないのではないかという日本社会論が含まれるが、ここでは、悪魔の登場という超自然現象を描いており、芥川龍之介の怪奇趣味の現れということができる。

また、「きりしとほろ上人伝」(「新小説」第24巻第3・5号(1919年(大正8)3月1日、5月1日))は、昔の「しりあ」を舞台に、「れおろほす」という心優しい大男が、この世の中で一番強いものに仕えたいと願い、様々な経験の末、キリスト教の隠者に洗礼を受け、ついに「えす・きりしと」(キリスト)と出会うという物語である。キリスト教の聖人伝集などを典拠としており、「きりしとほろ」とは、キリスト教の聖人、殉教者のクリストフォロス(Cristophoros(?—250頃))のことである。ここでは、愚者の中に聖なるものを見ようというテーマが扱われているが、この物語自体が、非現実的な展開をしており、芥川龍之介の怪奇趣味が背景にあると考えられる。

このほか、伴天連の加持祈祷により、死んだその娘が生き返るという「尾形了齋覚え書き」(1917年(大正6)1月)、善と悪双方を抱えて苦しむ悪魔の登場する「るしへる」(1918年(大正7)11月)、男装した女性が、自分をおとしめた女性の子供を火事から救い出すという「奉教人の死」(1918年(大正7)9月)、愚鈍な吉助が、禁教であるキリスト教への信仰から磔刑に処せられるが、その口から白い百合が咲くという「じゅりあの・吉助」(1919年(大正8)9月)、縁起の悪いといわれていた聖母像に、重病の孫の延命を願い、その願いがかなえられる「黒衣聖母」(1920年(大正9)5月)、南京の私娼が、現れたキリストと寝、梅毒が治ったという「南京の基督」(1920年(大正9)7月)、日本でのキリスト

教布教に望みを失った神父の前に、この国の霊の一人が現れ、忠告を与える「神神の微笑」(1922年(大正11)1月)、磔刑の直前、棄教する日本人おぎんを見て、大喜びする悪魔が登場する「おぎん」(1922年(大正11)9月)、信仰を守る男性が、次々と幻想的な誘惑にあう「誘惑」(1927年(昭和2)4月)などがある。

「王朝物」が、芥川龍之介の初期に集中していたのに対し、「キリスト教物」は、初期から後期まで、継続的に書かれている。これは、芥川龍之介のキリスト教に対する関心が、継続してあったからであろう。むろん、キリスト教という宗教を取り扱う以上、超自然的現象は必然的に現れてくるものであり、両国時代に培われた怪奇趣味だけが原因ではないだろうが、その物語の多くが、超自然的な舞台設定によっているのは、芥川龍之介の怪奇趣味も大きく影響しているであろう。

おわりに

芥川龍之介は、母親の病気のため、期せずして、両国という場所に青年時代までを育つことになる。そこは、明治時代になっても、まだ江戸時代を強く残す場所で、本所七不思議という怪奇な言い伝えも残るような土地柄であった。養父母に愛情をもって育てられた芥川龍之介は、そこで、様々な怪奇な話を聞き育ってゆく。

18歳で新宿に移住して、隅田川への思いを綴った文章「大川の水」や、父母から聞いた怪奇な物語などを集めた「椒図志異」というノートを作ったのは、芥川龍之介の両国への強い愛着の証拠と言っている。その後、芥川龍之介は、作家として活動するが、31歳のとき、起こった関東大震災によって両国は壊滅的な被害を受け、それをきっかけに芥川龍之介は、自分の育った両国についての作品を、自分の死の時期まで毎年書くことになる。芥川龍之介にとって、両国は、忘れ得ぬ場所であった。

また、芥川龍之介の「王朝物」、「童話」、「キリスト教物」は、いずれも怪奇趣味的な世界が設定されており、それは、幼い頃から両国で培われた怪奇趣味が基となっていると考えられる。

さらに、芥川龍之介の怪奇趣味は、単に趣味的な傾向というのではなく、怪奇的、幻想的な世界を切り捨ててゆく近代日本社会への批判でもあったかもしれない。近代化する日本社会の中で、近世の面影を残す両国の壊滅という象徴的な事柄、関東大震災を経験し、芥川龍之介は孤独となり、自死を選んだのかもしれない。芥川龍之介にとって、怪奇趣味は、単に表面的なものではなく、世界観、人生観に直結するものではなかったろうか。

そのような怪奇的なものを芥川龍之介に与えた両国は、芥川龍之介文学にとっても、また、芥川龍之介という一人の明治時代人にとっても、大きな意味があると考えられる。